

「チーム学校」を理解するために 実践編 その③

模擬事例のアセスメントと支援 解説編

―校内での連携と生徒支援を考える―

愛知教育大学 教職キャリアセンター教育支援専門職研究部門 制作

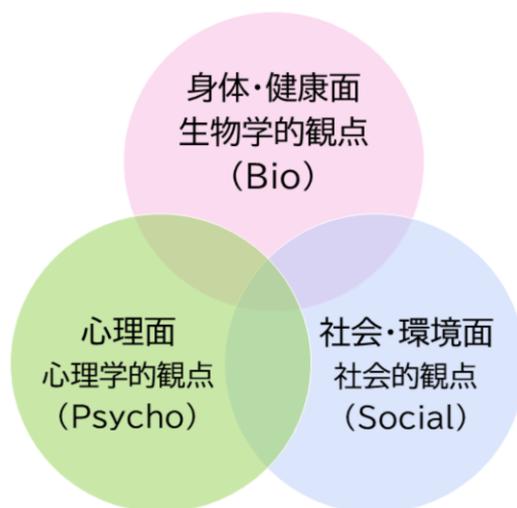
安藤久美子(心理講座) 岩山絵理(福祉講座) 成毛理子(教職大学院) 杉原里子(スクールソーシャルワーカー)

2023

「チーム学校」を理解するために 実践編 その③では、実践編その②で作成したアセスメントについて、例を用いて解説し、支援策をご一緒に考えたいと思います。

アセスメント の視点

BPSモデル(p91)
生物・心理・社会モデル
(Bio-Psycho-Social Model)



単独の専門職でアセスメントを行うことは難しい。多職種が連携してアセスメントすることが重要
BPSの3要因の、3つの観点から検討し実態を把握し、要因の多様さと複雑さを理解することが大切→支援資源へ

今回は、BPSモデルの枠組みを活用し、アセスメントを行いました。

概要編でも説明しましたが、BPSモデルは、身体・健康面などをみる生物学的観点、心理学的観点、社会・環境面をみる社会的観点の3つの観点の情報を集めること、そして、それぞれの相互作用に着目することが大切とされています。

3つの観点には重なる部分も多くあり、また複雑に関連しています。アセスメントを基に支援課題や支援策を考えていくこととなりますが、課題の多様さと複雑さを理解することが大切です。

生物学的観点(身体・健康面)	心理学的観点(心理面)	社会的観点(社会・環境面)
<ul style="list-style-type: none"> ・頭痛 ・発達障害の可能性はあるが大きな問題となるほどではない <p>A太の特徴は家庭環境の問題から生じるものではなく、発達障害の傾向があると考えることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習面で能力的な問題はないが、得意不得意の差が明確 ・学習意欲もある。 ・真面目 ・約束を守らないと許せない ・暗黙のルールが分からない ・抽象的なことを理解したり、想像することが苦手 ・臨機応変に動くのが苦手 ・耳からの情報が理解しづらい ・言葉通り受け取る ・1対1で対応すると落ち着くことができる ・小学校の時は保健室で、中1は仲の良い友人に相談してきたが、2年になり友人が別クラスとなり、相談できずにひとりで抱えるようになっていた。 ・母親への気遣いをみせる優しさがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校時は、ささいな友人トラブルや、周りと違う行動をとることはあったが、生徒指導上の問題になることはなく、目立たない存在 ・ひとりぼっちというわけではない ・別のクラスだが親しい友人はいる ・担任は、不登校になり、個別に対応。関係は良好。 ・担任が特に気にかけることもなかった ・部活は、今年度から練習が厳しくなった。 ・顧問は、本意が伝わらなかったことを反省、謝りたいと思っている。 ・母親は、本人が休みはじめてからパートを休んでおり、元気がない。 ・母は学校と協力しようと思っている。 ・母は本児を理解し、支えたいという思いがある ・母との関係は良好である

アセスメントの一部を例を挙げて説明します。

A太は、学習面で能力的には問題がないが、得意不得意が明確、約束を守らないと許せない、暗黙のルールが分からない、抽象的なことを理解したり、想像することが苦手、耳からの情報が理解しづらい、言葉通りに受け取る、1対1で対応すると落ち着くなどの特徴があることが分かりました。

家庭環境についてしてみると母との関係は良好であると思われるため、これらの特徴は、家庭環境からの影響ではないと予測されます。ここから生物学的特徴として発達障害の可能性が考えられます。

しかし、その特徴は大きな問題となるほどではなかったため、教員や部活動の顧問は、気にかけることはできなかつたと予想されます。

また、A太は一部の友人とは良好な関係をつくることができているようですが、現在は、クラスの環境が影響し、心理的には辛い状況であることも想像できます。

以上のことを踏まえてアセスメントを見直してみます。

BPSモデルの特徴:介入ポイントを多面的な視点で検討できる

生物学的観点(身体・健康面)	心理学的観点(心理面)	社会的観点(社会・環境面)
<ul style="list-style-type: none"> ・頭痛 ・学習面で能力的な問題はないが、得意不得意の差が明確 ・約束を守らないと許せない ・暗黙のルールが分からない ・抽象的なことを理解したり、想像することが苦手 ・臨機応変に動くのが苦手 ・耳からの情報が理解しづらい ・言葉通り受け取る ・周りをまねて動くことはできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・生真面目 ・学習意欲もある ・小学校の時は保健室で、中1は仲の良い友人に相談してきたが、2年になり友人が別クラスとなり、相談できずにひとりで抱えるようになっていた ・登校意欲はあるが、自分の行動に自信がないため、どうしたらいいか分からない ・1対1で対応すると落ち着くことができる ・母親への気遣いをみせる優しさがある 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校時は、ささいな友人トラブルや周りとう違う行動をとることはあったが、生徒指導上の問題になることはなく、目立たない存在 ・ひとりぼっちというわけでもなく、担任が特に気にかけることもなかった ・別のクラスだが親しい友人はいる ・担任は、不登校になり、個別に対応。関係は良好 ・部活は、今年度から練習が厳しくなった。 ・顧問は、本意が伝わらなかったことを反省、謝りたいと思っている ・母親は、本人が休まずに始めてからパートを休んでおり、元気がない ・学校生活で、周囲の理解を促し環境調整を思っている ・母との関係は良好である
<p>SSTなど本人の能力を高める</p>	<p>安心して過ごせる環境づくり</p>	<p>周囲の理解を促し環境調整</p>

それぞれの観点の相互作用から考えると、A太の能力的な課題であると捉えられていた特徴は、発達障害の可能性という生物学的観点から捉えなおすことができます。

このように捉えなおすことで、この課題については、本人の努力のみでは改善が難しいということも見えてきます。

介入のポイントとして、本人の変容を促すソーシャルスキルトレーニングなどを行うことも考えられますが、この観点に影響を与えている他の観点への変容を促し、課題の改善を目指す方法もあります。

A太のできていることに着目し、安心して過ごせる環境を整えることも考えられますし、今までA太の課題に気がつかなかった担任や部活活動の顧問に理解を促し、かわり方を工夫してもらうことも出来ます。

それぞれの観点は相互に作用していますので、一つに起こった変化は他の観点にも影響していきます。

BPSモデルを活用することで、A太を多面的な視点で捉え、様々な観点から介入ポイントを検討することができます。

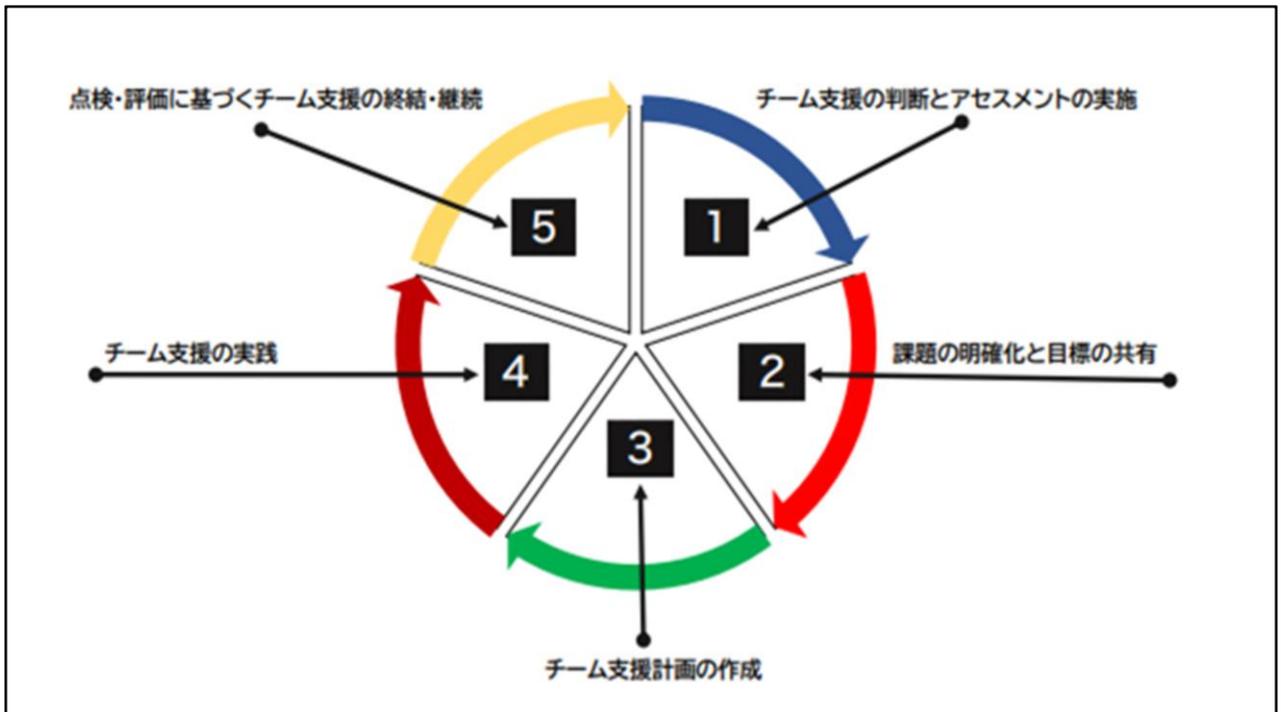
課題の整理と支援計画策定(例)

支援課題(支援の必要なこと)	支援計画策定(対応・方針)
学校で本人の話を聞く 本人の負担感緩和	①本人が登校するまでは、定期的に家庭訪問をして関係構築(担任) ②家庭訪問にSSWが同行して、学校で話せる人を増やす(担任・SSW) ③英語以外の教科の進捗状況を伝え、プリントを渡す(担任・学年主任) ④登校後は、保健室が利用できるようにする(養護・担任) ⑤SSW勤務日に本人に声掛け(SSW) ⑥本人にSC面接を勧める(SC・養教) ⑦クラスで関係作りのワークショップをする(SSW・担任)
本人の特徴を知る	①本人、母親から話を聞く(担任・特別支援コーディネーター) ②本人の特徴について本人、母親と共有する(担任・特別支援Co.)
本人の特徴に合わせた指導・支援	①必要な支援を考える(本人、担任、特別支援Co.) 例)指示は具体的に示す 図示して示す 困った時はすぐに担任に相談 ソーシャルスキルトレーニング ②全職員への周知(特別支援Co.)
部活動への参加	①部活顧問が本人の特徴を理解する(部活顧問・特別支援Co.) ②練習時の指示の見直しをする(特別支援Co.・部活顧問) ③本人が部活顧問と話す(部活顧問・特別支援Co.)
母親の負担緩和	①学校に気軽に相談できる関係作り(担任・特別支援Co.) ②SC面接を勧める(教頭・担任)

支援策の策定例です。

今回のケース会議にA太本人は参加していません。そのため会議の参加者は、自分たちのアセスメントをA太本人ともう一度一緒に見直し、そこから具体的な対応策をA太本人の合意のもと、作り出したいと思いました。

そうして考えた支援策を例として提示します。参考に見ておいてください。



ケース会議では図のプロセス1から3までを行うことになります。

プロセス1の段階から多職種が関わるのが有効です。多職種でアセスメントすることにより、BPSモデルを活用したときのように、共有される情報は質や量が高まり、多面的な視点で介入方法が検討されるため支援方法も多様になります。

支援策を共有したら、「誰がどの役割を担うか」、までを話し合っケース会議は終了です。アセスメントで終了ではないことに留意します。

この教材では扱いませんが、チーム支援のプロセスとしてプロセス4「チーム支援の実践」とプロセス5「点検・評価に基づくチーム支援の終結・継続」の段階があります。

支援の結果を見直し、支援策の修正が必要であれば再度ケース会議を持つこともあります。

まとめ

- ・チームで対応することの重要性
- ・ケース会議の開催の意義
- ・支援職の専門性の有効活用



まとめです。

チームで対応することで、児童生徒の心理面のみならず、学習面、社会面、健康面、進路面、家庭面から総合的に理解することができ、指導や支援においてもより豊かな対応ができるようになります。

また、学校だけで対応できない問題がある場合は、そこに関係機関が加わり、チームを形成していくこともできます。児童生徒の抱える問題が複雑で多岐にわたっているだけに、チームで関わることは重要です。

ケース会議では、情報共有が短時間で一堂にできることはもちろんですが、児童生徒を複眼的に見ることで気づきも多く、さらに合意形成に至るまでに意見交換するプロセスでチーム力が高まります。

それは、児童生徒への指導・支援の効果にあらわれます。

ケース会議は最初からうまくいく必要はなく、回を重ねることにスムーズに進行するようになるはずです。

学校の中には、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの支援の専門職がいます。積極的に活用することで、教育の視点だけではなく、心理面・生活面でアセスメントを深めることもできますし、支援策の策定の幅も広がります。学校だけではたちいかない課題について、地域の関係機関との連携調整を促す助けになってもらえます。

最後に、学校にはいろいろな児童生徒がいて、いろいろな課題があり、また学校それぞれの事情や家庭や地域との関係性があります。事例のようにはなかなか進まないのが現実ですが、ひとつひとつ積み上げることでそれぞれの「チーム学校」は構築されていきます。

引用・参考文献

- 飯島慶郎(2015)「全人的医療とは何か～対人援助のための生物・心理・社会モデル」電子書籍(kindle)
- 文部科学省 (2010) 生徒指導提要 教育図書株式会社
- 文部科学省 (2022) 生徒指導提要 東洋館出版社
- 東京都教育委員会 (2022) 教職員向けデジタルリーフレット「生徒指導提要 令和4年12月)」のポイント 東京都教育委員会ホームページ
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/leaflet_seito_shidouteiyou.html
(2023年5月15日閲覧)
- 渡辺俊之・小森康永(2014)「バイオサイコソーシャルアプローチ～生物・心理・社会的医療とは何か～」金剛出版

講義の視聴お疲れ様でした。引用文献・参考文献はスライドの通りで配布資料にもなっています。

この教材は2023年度スクールリーダー向けオンデマンド公開講座用に作成し、終了後に一部修正し、解説した内容の解説文（ノート原稿）及び研修資料とともに、愛知教育大学教職キャリアセンターのホームページにアップしたものです。

校内研修などにご活用ください。

現在は2024年の公開講座に向けて、実践編の続編を作成しています。

また、この教材は愛知教育大学の学部学生用にも作成しています。ご意見ご感想など、いただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。